アジア研究交流フォーラム◉

第8回モンゴル学術交流会「和光大学モンゴル祭り2003」の一環として

呉人徳司・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

二〇〇三年一一月二九日（土）に、和光大学で「第8回モンゴル学術交流会」が開催された。今回の学術交流会は和光大学総合文化研究所と同学術交流会の母体となっている「モンゴル民族文化基金」が共催したものである。同大学は二〇〇〇年から毎年「和光大学モンゴル祭り」を開催しており、今回はモンゴル民族文化基金の要請を受け、「モンゴル祭り2003」の一環として共催が実現された。当日は朝からあいにく冷たい雨が降り続く天気にもかかわらず、和光大学の先生方、モンゴル語やモンゴルの歴史、文化について勉強している日本人学生、モンゴルに関心のある社会人、日本各地の大学からこの日のために集まってきたモンゴル人留学生、また、すでに日本の大学、会社などで働いているモンゴル人など、合計八〇数名の方が参加した。

ここに、モンゴル民族文化基金学術部の担当者として、「第8回モンゴル学術交流会」での発表内容等についての概略を紹介させていただきたい。

当日は午後一時二〇分から、「モンゴル祭り03」の第一部としてモンゴル学術交流会が始まった。総合司会は和光大学表現学部教授の松枝到先生がお勤めになった。まず最初に三橋修学長からモンゴル英雄叙事詩『ゲセル』を具体例にあげ、口承文芸についての興味深いお話を含めたあいさつがあった。続いて、「モンゴル民族文化基金」の理事長で、和光大学の非常勤講師でもあるバー・ボルドー氏が、「基金」の活動や目標についての簡単な紹介をもって、開会のあいさつとした。

交流会は、研究発表、研究動向報告、特別講演の三部構成で行なわれた。

まず、千葉大学大学院博士後期課程のボルジギン・オルトナスト氏が「モンゴルの牧畜文化における馬の聖別―ウジュムチン地域を中心に―」というタイトルで発表した。オルトナスト氏は内モンゴル・シリンゴル盟西ウジュムチン旗出身で、日本語でも二冊の詩集を出版している詩人でもある。氏の発表は、遊牧民はなぜ馬を聖別するかという問題提起からスタートし、

モンゴル語で聖別を意味するセテル（seter）ということばの由来・意味、馬の聖別の準備、ラマ（僧侶）の役割、セテルの種類、地域による相違、聖別された馬に対するタブーなど、馬の聖別に関するモンゴルの伝統儀式をまとめて紹介した。オルトナスト氏は、この数年間の現地調査の資料に基づき、出身地である内モンゴルのウジュムチン地域で今も行なわれている馬を聖別する儀式を「火星における馬の聖別」、「北斗七星における馬の聖別」、「オボー祭りにおける馬の聖別」、「諸仏における馬の聖別」という四種類に分け、それぞれの特徴や聖別する時期などについて詳しく説明した。馬の代わりにバイクや車が交通手段としてよく使われるようになるとともに、馬の数が激減している内モンゴルの中でシリンゴル盟の東・西ウジュムチン両旗は、今も一番多く馬を放牧している地域である。オルトナスト氏の発表は、近代化が進む内モンゴル社会において、馬を聖別する伝統行事が活発に行なわれているウジュムチン地域に焦点を当てた学術的研究として、会場の聴衆の関心を引いた。

二番目に、東京大学大学院博士後期課程のボルジギン・セルゲレン氏が「1930年代初期日本の対内モンゴル認識―『現代史資料』を中心に―」というタイトルで発表を行なった。セルゲレン氏の発表を要約すると、以下の三点

にまとめられる。

一、満州事件前後の東部内モンゴルに関する日本語資料について

一九三一年九月一八日からのいわゆる満州事変の前後、東部内モンゴルにどのような勢力が存在し、どのような動向であったかに関する日本語で書かれた資料としては、一九六〇年代前半以後日本現代史を網羅する形で編纂された膨大な資料集の『現代史資料』全四五巻が最も詳しい。とりわけ、一九三〇年代初期を対象とした第七巻と第一一巻が重要である。

二、関東軍内部における「蒙古独立軍」に対する認識の相違と変化

満州事件以前は関東軍参謀であった板垣征四郎は、石原莞爾の「戦争史大観」を支持し、後に関東軍は石原・板垣コンビの戦略によって、満蒙領有という方向に暴走した。その核心は「関東軍満蒙領有計画」である。

満州事件発生直後、関東軍は早速蒙古独立軍の支援に乗り出した。具体的に言えば、ガンジュールジャブは、関東軍から軍事顧問と武器の提供を受けた。彼は自ら「蒙古独立軍」を組織し、長年の念願であった中国からの独立を試みた。

しかし、後に「蒙古独立軍」をめぐって、関東軍内部で意見の不一致が生じた。蒙古軍を正規軍隊とし、軍規を正したいという石原参謀の意見と、蒙古軍を「政権樹立に関係ある独立運動」の中で位置付け、モンゴルの特殊性からモンゴル軍の扱いに配慮したいという片倉参謀の方針の二つの構想が存在し、時には対立まで起きていた。

三、満州事件後、東部内モンゴルで活躍した二つの勢力について

満州事件直後の関東軍が、東部内モンゴルの治安維持を任せられる勢力として蒙古独立軍に一定の信頼を置いていたことは確かであり、このような形であれ、歴史の舞台に出現したことは大きな意味を持つものである。

当時のモンゴル社会の支配基盤をなしていたのは各盟旗の王公たちであった。東部内モンゴルの独立は最終的には実を結べずに終わったが、その後、蒙古独立軍はモンゴル王公らとの連帯や彼らの信頼を勝ち取り、王公たちと並んで、間違いなく東部内モンゴルのもう一つの政治勢力であった。

セルゲレン氏の発表は、このように日本側の資料を精読して、満州事件前後における東部内モンゴルが抱えていた複雑な情況を整理し、日本支配時代を前にしたモンゴル人の各勢力の対応を分析した。

最後の研究発表者は内モンゴル大学助教授で、昨年の九月に日本学術振興会外国人特別研究員として来日し、現在は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究員を勤めるソドビリグ氏で、「清朝末期の対モンゴル政策について」というタイトルで研究発表を行なった。ソドビリグ氏は、モンゴルの近代史、とりわけ清朝末期にモンゴルで実施された政策について研究を重ね、二〇〇一年に北京の人民大学清朝歴史研究所

で歴史学博士号を取得した内モンゴルの若手研究者である。モンゴル語によるソドビリグ氏の発表の要約は以下の通りである。

一、清朝のモンゴル支配

一六四四年、マンジュ（満州）軍は万里の長城を越え、明朝を倒し、中原を支配した。その前後マンジュの皇帝たちはゴビの南北に分布するモンゴル諸部族を支配下におくことに成功した。清朝はモンゴルにある程度の自主性を認め、それに適するような「盟旗制」を実施してきた。しかし、清朝末期になり、一九世紀末、二〇世紀初頭になると、清朝は従来の政策を転換し、大規模な農地開拓を目的とする漢人をモンゴルに移民させ、「移民実辺」、州県の増設、さらには、モンゴルの盟旗を省県に改めるといった「新政」を実施しはじめた。

二、清朝の対モンゴル政策転換の主な理由

1、帝政ロシアの東進に備えるため、モンゴルへの漢人の移住を奨励し州県の増設により、最終的には内地同様の省制を導入するべきだという見解が朝廷に強まった。

2、辺省監督らから、漢人移民によるモンゴルでの農地開拓が増税につながり、朝廷の財政難の負担を減らすという度重なる上奏があった。

3、清朝の政治におけるモンゴル王公の立場が次第に弱くなり、逆に漢人官吏の地位が上がり、中にはモンゴル藩部を内地の省と統合することを強く主張する人たちが現れた。

三、清朝の対モンゴル政策の激変と一九世紀末〜二〇世紀初頭のモンゴル社会

1、農地開墾と州県増設を主眼とする「新政」がモンゴルの牧草地を減らし、伝統的経済に打撃を与えた。

2、さまざまな社会問題が激化したため、自らの運命や民族の未来を憂慮し、困窮打開の道を模索する人たちが増えた。

3、清朝末期、モンゴルでの「設省」政策の具体化がモンゴル王公たちに衝撃を与え、それにより内・外モンゴルの王公たちが清朝朝廷に反感を持ち、さらに政治的独立を目指す人たちが現れた。それが二〇世紀初頭にモンゴルで起きた急激な政治的変化の主な理由であった。

このように、清朝末期の対モンゴル政策は、それ以降長期にわたってモンゴル社会の政治に大きな影響を与え、結果的にモンゴルの独立にも繋がっていったと結論付けた。同時に、清朝末期の対モンゴル政策を今後も大いに研究する余地のある分野であると強調した。

三名による研究発表の終了後、一五分間の休憩に入った。会場の外では、和光大学の学生たちが用意してくれたモンゴルのスーティ・ツァイ（ミルクティ）がふるまわれた。

その後、学術交流会は「研究動向報告」に移り、下記の三名による報告が行なわれた。世界各地でおこなわれているモンゴル研究の最新の動向を伝える目的で、今回の学術交流会から、新たに加えられた企画である。

まず、一橋大学社会学部の助手を勤めるシンジルト氏が二〇

○三年三月にニューヨーク市で開かれたモンゴル学会（The Mongolia Society's 2003 Annual Meeting）と二〇〇三年九月にオクスフォード大学で開かれたチベット学会（International Association for Tibetan Studies Tenth Seminar）について簡単に紹介した。ニューヨーク市でのモンゴル学会では、モンゴルの社会、宗教、文化、歴史、メディア、考古学、環境問題の七つのセクションに分かれ、世界各地の研究者によっておこなわれた研究発表の概要が紹介された。オクスフォード大学のチベット学会では、「チベットとモンゴルの境界面に関するパネル」（Panel on the Tibetan-Mongolian interface）というセクションが設けられ、モンゴルとチベットの間の歴史的、文化的、宗教的関係について一七名の研究者が研究発表を行なったことが紹介された。

その次は、筆者呉人徳司が二〇〇三年九月にロシア・カルムイク共和国の首都エリスタ市とブリヤード共和国の首都ウラン・ウデ市で開かれた二つの学会について紹介した。エリスタ市で開かれた学会のタイトルは「新千年紀におけるモンゴル研究」で、ロシア各地の研究機関の研究者、そして中国、モンゴル、ドイツなどの国からの研究者が参加した。ウラン・ウデ市で開かれた学会の名前は「バイカルでの会合」（The Baikal Meeting）で、東シベリア国立文化・芸術アカデミーが主催したものであり、八日間にわたる文化祭の一環として、三日間の予定で、主に芸術と教育の問題に重点をおいた会議だった。ロシアのこの二つの学会には、新潟産業大学で教鞭をとるバイカル氏も参加し、研究発表を行なった。この二つの学会については、機会を改めて紹介するつもりなので、会議の詳細については、それにゆずりたい。

研究動向について、最後にオーストラリア国立大学助教授で、現在一橋大学客員教授を勤めているナランゴワ女史が、ヨーロッパにおける最近の地域研究の動向を紹介し、それがモンゴル研究とどのように結びつくのかについてご自身の考え方を述べた。また、ナランゴワ女史はご自身が博士号を取得したボン大学をはじめ、ベルリン大学、ライプツィヒ大学などドイツの各大学におけるモンゴル研究の歴史、現状などについて説明し、また、数年間研究員として滞在したデンマークのコペンハーゲン王立図書館、北欧アジア研究所などの研究機関に保存されているモンゴルに関する資料について簡単に紹介し、会場に集まったモンゴル人留学生の関心を集めた。

そして、学術交流会を締めくくる特別講演として、和光大学人間関係学部のユ・ヒョヂョン教授が「「国境にまたがる民の世界」を見つめて―私にとっての「モンゴル」―」というタイトルで、異国に暮すモンゴル人にとって、大変興味深い話をされた。

ユ・ヒョヂョン教授は民族や民族関係をめぐる状況について多面的に研究されており、対象地域もロシアの極東・シベリア地域を中心に中国、モンゴル、朝鮮、日本にまたがっている。和光大学では専任教員とモンゴル人の非常勤教員とから構成されたモンゴル学術調査団が結成され、一九九五年から九七年ま

で五回にわたってモンゴル、中国、ロシアの三カ国にまたがる学術調査を行なっており、ユ・ヒョヂョン教授は調査団の中心メンバーとして関わっていた。このモンゴル学術調査団によって出版された『変容するモンゴル世界―国境にまたがる民―』（新幹社、一九九九年一月）は、国境にまたがって暮すモンゴル人社会を多角的な観点から考察した優れた研究書である。ユ・ヒョヂョン教授は、モンゴル世界に興味を持ったきっかけやモンゴル研究がご自身の研究にもつ意味などを述べた後、あまり知られていない近現代における「モンゴルと朝鮮」および「モンゴル人と朝鮮人」とのすれ違いを含むさまざまな出会いや関係性に関する歴史的な事実を紹介しながら、いまを生きる者として我々がともに考えるべき多くの問題を提起された。ご自身が現在もっとも関心をもっておられる「民族識別」についても触れ、中国東北地方のダゴール人などの識別をめぐる状況について興味深い見解を述べられた。

学術交流会では、各研究発表に対して参加者から多くの質問、コメントが出され、発表者と聞き手の間に活発なやり取りが交わされ、会場は終始ほどよい緊張感がただよう学術交流の名に相応しい良い雰囲気に包まれていた。

学術交流会は夕方五時半に終了し、場所を移して、六時から第二部の「文化交流―モンゴル料理を楽しむ、モンゴル音楽を楽しむパーティー」が始まった。和光大学の学生たちと同大学に留学するモンゴル人留学生たち（特に佐治俊彦教授ゼミのみなさん）がつくったおいしい料理と飲み物を口にしながら、関東地方在住のモンゴル出身のプロの音楽家たちがご自慢のモンゴル民謡、踊り、馬頭琴の演奏を披露した。パーティー会場には常に拍手の音が鳴り響き、熱気に包まれた。最後に、昨年の夏モンゴル国の首都ウランバータル市とその周辺地にユ教授の引率でフィールド・ワークに行って来た和光大学の学生たちもステージに上がり、モンゴル滞在中に習ったモンゴルの歌を楽しく歌い、プロの演奏家たちに負けない気迫で、大いに楽しませくれた。二時間にわたるパーティーがあっという間に過ぎた。

最後にこの場を借りて、「モンゴル学術交流会」の設立、これまでの経緯などについて、簡単に紹介させていただきたい。

「モンゴル学術交流会」は、二〇〇〇年四月に在日モンゴル人留学生、研究者が協議して、互いの学術交流を深め、研究成果を披露する場を共有する目的で自主的に立ち上げたものである。この十年近くの間、日本各地の大学にさまざまな分野で学ぶモンゴル人留学生が多くなるにつれ、モンゴルに関する情報を交換し、学術的な交流を深める場が求められるようになったからである。社会科学分野の研究報告が中心であるものの、自然科学分野の研究者にもそれぞれの研究成果を分かりやすく紹介してもらう機会にもなっている。今後は日本の研究者との連帯をさらに深め、日本におけるモンゴル研究を一層促進していくことを目指していくつもりである。

「モンゴル学術交流会」は、二〇〇〇年六月三日に早稲田大学で第一回の会議を開いて以来、毎年春秋二回の定例研究発表会

を行なっている。より広い地域でより多くの人々との交流を目標に掲げているので、開催場所は東京で一回、その他の都道府県で一回というパターンが多かった。これまで早稲大学や東京外国語大学のほか、大阪外国語大学、東北大学（仙台）などの大学で開催している。また、開催先の大学の各分野の教員に特別講演を依頼することも恒例となっており、私たちは先生方から貴重な学問や経験を学ぶことができた。

「モンゴル学術交流会」は、当初は毎回三人からなる実行グループを設けて実施してきたが、二〇〇二年夏に、中国出身の在日モンゴル人が中心となって、モンゴル語教育を支援する目的で設立された「モンゴル民族文化基金」の傘下におかれるようになった。

なお、モンゴル民族文化基金については、同公式サイトをごらんください。

http://www2.neweb.ne.jp/wd/sergelen/mcf/